

「キリストの体」

(Ⅰコリ12:12～31)

挽地茂男

2019.3.17 日本基督教団千歳丘教会礼拝

「一人はみんな〔万人〕のために、みんな〔万人〕は一人のために」という言葉は、ラグビーなどのスポーツで、特に団体競技で使われる標語ですが、もともとは、アレクサンドル・デュマの『三銃士』にあるフランス語の言葉（"un pour tous, tous pour un" アン・プール・トゥ、トゥ・プール・アン）



で、これをドイツの保険学者マーネスという人がドイツ語“Einer für Alle, Alle für Einen”に訳して保険制度を的確に表す言葉として使います。そこからさらに英語に訳されて、ラグビーのスピリットを表す有名な合言葉になりました

た。そして one for all, all for one と言えばラグビーというくらい定着しています。

いずれにせよ、三銃士であろうが、保険であろうが、ラグビーであろうが、みんなと一人の関係、全体と個の関係が切っても切れない関係にあることを表しています。聖書が教える教会もまた、このような関係にあります。コリントの信徒への手紙一の12章はそのことを教えます。この聖書箇所は、教会を形成していく際に何度も読み返す必要のある箇所です。つまりこの箇所は、すでにⅠコリント3章を読んだときに触れたように、教会の形成に不可欠な(1)原理と(2)認識と(3)組織について教えとくれます。

1. まず原理です。「一と多」の原理です。一即多。教会は、まず①一つであること。そして同時に教会には②多様性があることです。教会は「多様性の一致」という言葉で語られる共同体なのです。つまり、パウロがこの第一コリントの手紙で示す教会的原理は「一」と「多」ということ、教会という一つの体には、多くの部分があって成り立っているという事

実です。12-14節。

12:12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。
12:13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。12:14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。

まずは「一」の原理です。教会は本来的に統一性をもつ共同体なのです。パウロは「一」（ひとつ）という言葉をつづのものにつけてそのことを訴えます。まずわたしたちは ①「一」つの洗礼（initiation）によって（v.13）、この「世からの召し出」されたという事実。そして②「一」つの霊（Spirit）をのむ〔聖霊が、命の

水や、神の息にたとえられることがあるので「のむ」という言葉が使われた〕ことによって（v.13）、「神の思いと力」（スピリット）を共有するものとなり、そして③「一」つの体（body）にされ（v.12-13）、神の霊・スピリットによって活動する「運動体」として存在するようになったと語るのです。**教会とは神の召しにより選ばれ集められ一体とされて、神の霊に生かされる「キリストの体」なのです。**

次に教会の特徴となる「一」とともに「多」の原理です。それは教会の持つ本来的な多様性を示しています。パウロはそれを体に例えて語っています。「**体は一つでも、多くの部分から成り**」（v.12）、また「**体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています**」（v.14）と語ります。つまり体は「一即多、多即一」という特徴を持ち、多くの部分が有機的に統合されて一つの体が形成されるのです。教会とは、人間の身体と同じように多くの部分が一つに統合された「キリストの体」なのです。そして、この多様性は、いろいろな才能や賜物を持った人がいていろい



ろな働きをするという、機能的な「働きの」多様性のみではありません。この多様性には人種的・社会層的多様性「つまり性別、人の性格や、慣習や、伝統、年齢の差を含めた多様性」まで含まれているのです。

人種的に「多」であることを、パウロは「ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと」(v. 13) キリストにあって「一」つと語ります。それは人種や、文化的な差異を軽視したり、それに無頓着であるという意味ではなく、それらの差異がもたらす問題を知りつつ、その問題を超えていくという意味です。以前紹介したのですが、アメリカに人種差別を乗り越えようとしている教会があります。Circle Church「輪・和の教会」という教会です。40年ほど前にその教会の礼拝に参加したことがあります。今ではその規模と働きがおおきく拡大して、現在、健康・医療活動や法律相談、若者の就学支援や、技術教育、等を含む教会を中心に地域を変えていく活動に発展しています。わたしが初めて礼拝に参加したときは、まだ小さな教会で、といっても100名

は超えていましたが。そこには、様々な人種の人が集まります。礼拝が始まると、黒人の聖歌隊が身体をスイングさせて歌いながら教会に入場してきます。そして会衆が立ち上がりその讃美歌に加わって、礼拝が始まります。聖歌隊が席に着きますと、白人の司会者が祈りを捧げます。そしてそして説教になると韓国人「オリエント」の説教者が説教を致します。この教会は、アメリカ社会の現実である「人種差別」(racism)に、福音に立つ立場からその問題に向かい合い、それを克服しようと努力してきた教会なのです。

またはパウロは、社会層的「社会的階級について」いろいろな人がいる「多」(多様性)を主張します。「奴隷であろうと自由な身分の者であろうと」(v.14) キリストにあって「一」つと語ります。社会的な働きや地位や身分を超えて一つなのです。実は、日本の首相には意外にクリスチャンが多い



のです。判明しているだけでも、戦前では原敬〔明治6年（1873年）カトリックとして受洗、洗礼名「ダビデ」〕、戦後では吉田茂は、妻の雪子さんがカトリックだったこともあり、吉田家は長男の健一を除いてみな信者で、吉田もカトリックには好意を持っておりました。1964年（昭和39年）に建設された東京カテドラル聖マリア大聖堂の後援会の会長も引き受けております。ただし岳父の牧野伸顕（大久保利通次男）のアドバイスもあって、極右による標的となることを避けるため、吉田自身は生涯洗礼を受けませんでした。それでも東京大司教館司教だった濱尾文郎〔実兄濱尾実は東宮侍従〕に「元氣なときはともあれ、死にそうになったら、洗礼をうけて“天国泥棒”をやってやろう」と語っていたこともあって、濱尾は吉田に死後ただちに洗礼を授け、「ヨゼフ・トマス・モア」として天国に送っております。日本社会党の片山哲〔日本基督教団富士見町教会会員〕、鳩山一郎（フリーメイソン）、大平正芳〔1929年（当時19歳）日本基督教会・観音寺教会で受洗〕。戦前、戦後を通して首相の数は計

62人〔全体で97代／安倍晋三首相は第90, 96, 97代の総理大臣〕。約13%の割合に当たります。

また、「社会的弱者」（social minority）の受容を率先して心がける教会もあります。大阪の釜ヶ崎に教会と日雇い労働者やホームレスのシェルター（避難所、駆け込み寺）を兼ねたような「ふるさとの家」という社会福祉施設があります。〔NHKの特別番組でも紹介されたことのある〕本田哲朗神父という有名な神父が、そこでの活動を大きく前進させました。神学生が夏に実習をさせていただいていた関係で、何度かお邪魔させていただきました。ある年そこを訪ねたその日に、たまたま（ホームレスの詩人と呼ばれた老婦人の）ご葬儀があるというので、会場の設営を手伝ったのですが、会堂にスタンド型のたばこ盆を配置するのですね。「兄ちゃん、兄ちゃん、たばこ盆は2列に一つ」と



サービスをする側ではなく サービスを受けなければならない側に主は、おられる。

指示されてね——まるで飯場や建築現場で親方が仕切っているような感じです——神学校の教師であろうが日雇いであろうが、関係ないのです。パウロも言います「**奴隷であろうと自由な身分の者であろうと**」これらの両極端の社会層が、一つの教会に加えられ、一つの体として互いに仕え合う教会、それがパウロが目指した教会であり、神の御心にかなう教会なのです。あらゆる多様性を生み出す神は、多様性をもち統一体を創り出すことができる方です。



「**皆一つの体となるために**」(v.13) 神は「一つの洗礼」と、「一つの霊」を授けられたのです。教会のすべての運動と力の源泉は神にあります。この神の御前にあって教会が一つの体となるとき、教会はすでに、社会を変え始めているのです

2 次に認識です。さて教会が一つの体として有機的結合を保っていくためには、4つの認識が必要だとパウロは語っています。まず第1の

認識は、体のそれぞれの部分は違っているという認識です。目と耳は違いますし、手と足も違います。体のそれぞれの部分が相互に違っているように、教会のメンバーである一人一人は違う存在だという認識が、教会というキリストの体の一つである為には必要なのです。15 – 20 節。

12:15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。12:16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。12:17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。12:18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。12:19 すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。12:20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。つまり、体の諸器官はそれぞれ異なる機能を持っています。そして異なる機能を持っているからこそ、その違いによって体全体が成り立っているのです。それぞれの

器官の持つ違い・特異性は体にとって、なくてはならないもののなのです。

第2に大切な認識は、体の各部分は、お互いがお互いを必要としているということ、**相互必要性**〔わたしたちの存在は他者を必要としていること〕の認識、つまり互いが互いに依存しているという**相互の依存性**の認識です。21－22節を見てみましょう。

12:21 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。12:22 それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

身体の中でいらないと思う部分はあるでしょうか。「爪」なんかは、ひょっとすると無くてもいいかもしれない、と思われるでしょうか。人とサル（類人猿）においては平爪が発達しており、他の動物より、物を掴んだり操作する能力に優れています。さらにまた、硬い爪のおかげで、物を分ける能力、挟む能力なども飛躍的に発達しました。手先の使用能力は、文化・芸術の発展には、きわめて重要な要

素なのです。

眉毛や睫毛もいらない、とお考えでしょうか。眉はほぼヒトに独特のものです。まつげは多くのほ乳類に見られるが、眉毛はありません。眉毛は機能的には、額から落ちる汗や雨水が目に入らないようにする役割をもっています。同様に、睫毛はほこりや小さなゴミが目にはいるのを避ける役割も担っています。機能として大したことがないかもしれませんが、しかし、眉は人の表情を作る重要な役割を担っており、それによるコミュニケーションにおいても重要な役割を果たしています。歌舞伎など世界の古典的な舞踊や芸能において、目や口元と同様に眉を強調する化粧を行う例は数多く見られます。



そして、教会というキリストの体が一つであるために必要な第3の認識は、体の各部分が互いに〔相互に〕配慮し合うことが必要であるという、**相互配慮の必要性**の認識です。23－25節を見てみましょう。

12:23 わたしたちは、体の中でほ

かよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとしします。12:24 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣り



のする部分を
いっそう引き
立たせて、体
を組み立てら
れました。12:
25 それで、体

に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。

その配慮はまず、(1)負の評価を受ける部分、否定的な評価を受ける〔ほかよりも弱く見える、恰好が悪いと思われる、見苦しい、見劣りする (v. 25)〕部分に対して必要とされます。それはまず、それらに対して(2)神が配慮しておられるからです。こう語られています。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。(v. 25)

第4の認識は、この相互の緊密な結びつきは、神の望んでおられることだという、認識です。神は体の諸部分が有機的に結合していることを、望んでおられるのです。

18節はそう教えています。

12:18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。人間の身体は、神の配剤の見事な現れです。キリストの体である教会についても、そうなのです。26－27節を見てみましょう。

12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

one for all, all for one, 一人はみんなのために、みんなは一人のために、存在するのです。それが教会です。三銃士や保険やラグビーだけではないのです。キリストの体である教会こそ、そうなのです。ひとつの部分が苦しめば、すべての部分が苦しみ、ひとつの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。これがキリストの体である教会なのです。

3 人的組織 しかしこのキリストの体としての教会は、具体的には教会組織という形を取ることになります。キリストの体を具体化するものとして、教会に人的組織

（人間の組織）が立てられます。これは神の御心にかなったことでした。28節は「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。」と始まります。当時これらの教会の組織・職制が意味していたもの、教会を建て上げる上でこれらが満たした教会の必要とは何であったでしょうか。これらの教会組織・職制が担った本質とは何なのでしょう。

まず①使徒です。キリストの教会は「使徒的」な教会と言われます。教会は使徒的な性格、使徒性を持つと言われます。カトリックの法王（教皇）は、主イエスが「この岩の上にわたしの教会を建てる」と言って、ペトロに与えた天国の鍵に象徴される権威の継承者と考えられます。カトリックではペトロが初代の法王なのです。カトリックやギリシア正教、聖公会等はこのような伝統を大切にす、伝統的・制度的な教会です。しかし使徒性〔使徒的性格〕は単なる伝統の形式を継承することで

はありません。初期のキリスト教において、使徒たちの持っていた大切な働きは、(1)主イエスからの教えの伝承者としての働きと、(2)主イエスの復活の証人としての働きです。つまり使徒という職務によって表されているのは、教会が**使徒性・伝統性・継続性・保守性**をもつ共同体であるという意味なのです。それを言葉として最も端的に表しているのが、使徒信条なのです。



サン・ピエトロ大聖堂（バチカン）

次に②預言者です。預言者は旧約の時代だけに現れるのではなく、新約の時代にも多くの預言者がいるのです。預言者とはどういう人でしょうか。預言者は、時代や状況に即応して神の言葉を聞き、聖霊によって語る者のことです。彼は(1)時代や状況を見きわめ、(2)神の言葉を直接的に伝達するのです。日本基督教団から時に応じて出される祈りの要請や、公式声明は教会

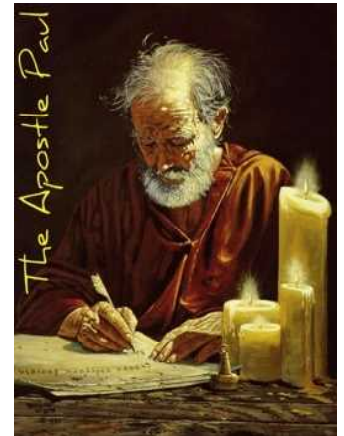
の預言者的な性格を表しています。預言者という職務によって表されているのは、教会が預言者的性格つまり**預言者性・時代対応性・革新性**をもつ共同体であるということなのです。

そして次に③教師です。教師とは、神の言葉の理解を助ける働きをする者。神の言葉と信徒の生活を繋ぐ者のことです。以上の使徒、預言者、教師という三つの働きは、教会がつねにみ言葉を聞かために存在する働きです。そしてパウロは①～③〔使徒、預言者、教師〕でみ言葉の重要性を確保した後、具体的な働きの指摘にむかいます。④奇跡を行う者、⑤病気を癒す賜物を持つ者、⑥援助する者、⑦管理する者、⑧異言を語る者と列挙されていきます。教会は多様な働きによって支えられている共同体です。29－30節

12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。

教会は、牧師だけでは成り立たな

い共同体です。牧師一人で成り立っている教会は、早晚倒れます。神さまの原則に則っていないからです。教会は、さまざまな働きの集合体として存在しているのです。そしてそこにおいてこそ、多様性に基づいた一致が実現されるのです。one for all, all for one.〔ひとはみんなのために、みんなはひとりのために〕が現実のこととなるのです。



執筆中のパウロ

イエス・キリストは2000年の昔、実際に身体をもってこの地上を生きられました。その生涯を通して具体的に、人々と接触を繰り返しながら、救いのメッセージを広げていきました。そして十字架でその救いを完成して、死んで復活し、この地上を離れられたのでした。今イエス・キリストご自身の身体はこの地上にありません。この地上で、ご自身の思いを実現するための唯一の体は、教会と呼ばれるキリストの体だけなのです。キリストの愛を語る声を持っているのはこの体なのです。キリストの愛の業を実行できる手足

を持っているのは、この体なのです。キリストの思いはこの体を通して、現実のものとなるのです。神の救いの業を実現するのに必要なのは、この体なのです。

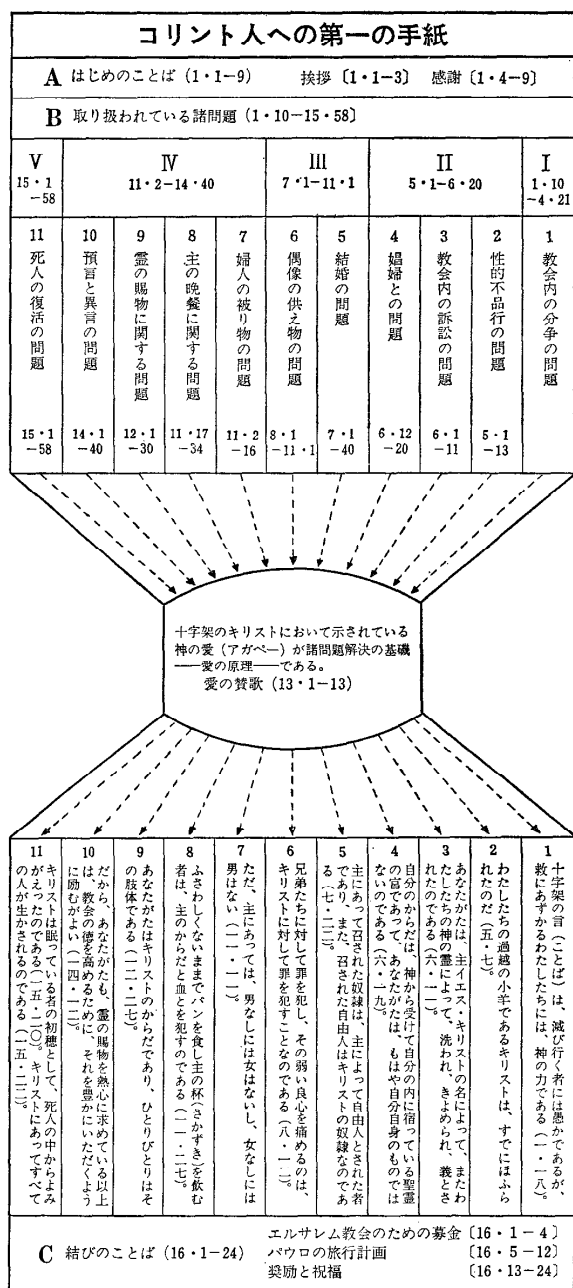
そして最後にパウロは、これまで述べたあらゆる賜物よりも大きな優れた賜物が存在していて、そ

れを求めるように奨めます。パウロはそれを、「最高の道」と呼んでいます。31節

12:31 あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

そしてこれが13章につながります。有名な「愛の章」です。この13章は、コリントの信徒への手紙一を読み解く鍵になる章でもあります。13章を途中少し省いて、一読しておきましょう。〔新改訳聖書の翻訳でお読みします〕

1たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。2また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。3また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。4愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢



せず、高慢になりません。⁵ 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、⁶ 不正を喜ばずに真理を喜びます。⁷ すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。⁸ 愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。〔中略〕¹³ こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

そしてわたしたちは、神さまによって愛され、その愛によって信仰の灯を点され、召されて教会の一員となったのです。キリストが一人一人のために、その命を捨てられたからです。そこに愛を見出したからこそ、互いに愛し合うべき存在として一つの共同体を形成します。教会は「神の家族」と呼ばれます。この家族の基盤は、キリストの愛にしかありません。それ以外の基盤は、教会を建て上げるには脆弱すぎるのです。だからこそわたしたちは教会を建て上げるために、キリストのみ言葉を大切にし、愛の交わりを大切にし、宣教メッセージを大切にし、そこに示

される神の御心を、具体的な働きとして実現できるように、躓きながらも神の助けによって努力しているのです。そして教会が福音〔主の十字架と復活〕を具体的な姿で証しする程に成長するとき、教会のすべての働きを通して、神の栄光がたたえられるのです。今週も、小さな愛の業を大切に歩んでまいりましょう。祈りましょう。

2019.3.17 日本基督教団千歳丘教会礼拝



12:12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。

12:13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

12:14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。

12:15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。

12:16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。

12:17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。

12:18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。

12:19 すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というも

のがあるでしょう。

12:20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。

12:21 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。

12:22 それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

12:23 わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとしします。

12:24 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。

12:25 それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。

12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。

12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。

12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。

12:31 あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

12・12 Καθάπερ γὰρ τὸ σῶμα ἐν ἔστιν καὶ μέλη πολλὰ ἔχει, πάντα δὲ τὰ μέλη τοῦ σώματος πολλὰ ὄντα ἐν ἔστιν σῶμα, οὕτως καὶ ὁ Χριστός·

12・13 καὶ γὰρ ἐν ἐνὶ πνεύματι ἡμεῖς πάντες εἰς ἓν σῶμα ἐβαπτίσθημεν, εἴτε Ἰουδαῖοι εἴτε Ἕλληνες εἴτε δοῦλοι εἴτε ἐλεύθεροι, καὶ πάντες ἐν πνεύμα ἐποτίσθημεν.

12・14 καὶ γὰρ τὸ σῶμα οὐκ ἔστιν ἐν μέλος ἀλλὰ πολλά.

12・15 ἐὰν εἴπῃ ὁ πούς, “Ὅτι οὐκ εἰμὶ χεὶρ, οὐκ εἰμὶ ἐκ τοῦ σώματος, οὐ παρὰ τοῦτο οὐκ ἔστιν ἐκ τοῦ σώματος;

12・16 καὶ ἐὰν εἴπῃ τὸ οὖς, “Ὅτι οὐκ εἰμὶ ὀφθαλμός, οὐκ εἰμὶ ἐκ τοῦ σώματος, οὐ παρὰ τοῦτο οὐκ ἔστιν ἐκ τοῦ σώματος·

12・17 εἰ ὅλον τὸ σῶμα ὀφθαλμός, ποῦ ἡ ἀκοή; εἰ ὅλον ἀκοή, ποῦ ἡ ὀσφρησις;

12・18 νυνὶ δὲ ὁ θεὸς ἔθετο τὰ μέλη, ἐν ἑκάστον αὐτῶν ἐν τῷ σώματι καθὼς ἠθέλησεν.

12・19 εἰ δὲ ἦν τὰ πάντα ἐν μέλος, ποῦ τὸ σῶμα;

12・20 νῦν δὲ πολλὰ μὲν μέλη, ἐν δὲ σῶμα.

12・21 οὐ δύναται δὲ ὁ ὀφθαλμός εἰπεῖν τῇ χειρί, Χρεῖαν σου οὐκ ἔχω, ἢ πάλιν ἡ κεφαλὴ τοῖς ποσίν, Χρεῖαν ὑμῶν οὐκ ἔχω·

12・22 ἀλλὰ πολλῶ μᾶλλον τὰ δοκοῦντα μέλη τοῦ σώματος ἀσθενέστερα ὑπάρχειν ἀναγκαῖά ἐστιν,

12・23 καὶ ἃ δοκοῦμεν ἀτιμότερα εἶναι τοῦ σώματος τούτοις τιμὴν περισσοτέραν περιτίθεμεν, καὶ τὰ ἀσχήμονα ἡμῶν εὐσχημοσύνην

περισσοτέραν ἔχει,

12·24 τὰ δὲ εὐσχήμονα ἡμῶν οὐ
χρείαν ἔχει. ἀλλὰ ὁ θεὸς
συνεκέρασεν τὸ σῶμα τῷ
ὕστερουμένῳ περισσοτέραν δοῦς
τιμὴν,

12·25 ἵνα μὴ ᾖ σχίσμα ἐν τῷ σώματι
ἀλλὰ τὸ αὐτὸ ὑπὲρ ἀλλήλων
μεριμνῶσιν τὰ μέλη.

12·26 καὶ εἴτε πάσχει ἐν μέλος,
σμπάσχει πάντα τὰ μέλη· εἴτε
δοξάζεται (ἐν) μέλος, συγχαίρει
πάντα τὰ μέλη.

12·27 Ὑμεῖς δέ

ἐστε σῶμα Χριστοῦ καὶ μέλη ἐκ
μέρους.

12·28 καὶ οὓς μὲν ἔθετο ὁ θεὸς ἐν τῇ
ἐκκλησίᾳ πρῶτον ἀποστόλους,
δεύτερον προφήτας, τρίτον
διδασκάλους, ἔπειτα δυνάμεις,
ἔπειτα χαρίσματα ἰαμάτων,
ἀντιλήμψεις, κυβερνήσεις, γένη
γλωσσῶν.

12·29 μὴ πάντες ἀπόστολοι; μὴ
πάντες προφῆται; μὴ πάντες
διδάσκαλοι; μὴ πάντες δυνάμεις;

12·30 μὴ πάντες χαρίσματα ἔχουσιν
ἰαμάτων; μὴ πάντες γλώσσαις
λαλοῦσιν; μὴ πάντες διερμηνεύουσιν;

12·31 ζηλοῦτε δὲ τὰ χαρίσματα τὰ

μείζονα. Καὶ ἔτι καθ' ὑπερβολὴν ὁδὸν
ὑμῖν δείκνυμι.